

【背景】

Student apathy は大学生の本業である学問に対する意欲がなくなる「無気力学生」を示す症状として用いられている。このような Student apathy 研究は丸井(1967)の「意欲減退学生」として紹介したことに始まる。以後、笠原(1978)が臨床学的事例研究において Student apathy の特徴には、本来もつ精神病理的側面と、新たに加わった青年期の発達心理学的側面のアイデンティティの拡散、心理的混乱や成人期の構造転換ができないといった症状が発表されている。

【目的】

Student apathy を「精神病の無気力とは異なり、心理的原因を主とした学生の本業である学問に対しての意欲の減退を示すこと」と定義し、その上で一般学生のアパシー傾向について、その要因の一つと指摘される自我同一性の拡散と進路動機のあり方について関連性を検討する。

【方法】

アパシー傾向測定尺度(鉄島・1993)、自我同一性尺度(宮下・1987)、進路選択に関する自己効力尺度(田澤・2002)の3尺度を、私立大学生180名(男性:57名,女性:123名)対象者とし実施した。分析方法としてt検定、因子分析、相関分析を行った。

【結果】

アパシー傾向尺度、自我同一性尺度、進路選択の自己効力尺度の各尺度をt検定で分析し、各尺度において有意な性差が見られた。因子分析を男女別で行い、男性は「気力の欠如」、「授業からの退却」、「将来への展望」、「対人関係の希薄さ」、「進路選択の自己効力」の因子が抽出された。女性は「授業からの退却」、「気力の欠如」、「学業からの退却」、「集中力の困難さ」、「将来への展望」、「対人関係の希薄さ」、「進路選択の自己効力」の因子が抽出された。各因子間における相関分析では、男性が「気力の欠如」と「将来への展望」との間に正の相関が、「気力の欠如」と「進路選択の自己効力」との間に負の相関が、「将来への展望」と「進路選択の自己効力」との間に負の相関がみられた。女性は、「気力の欠如」と自我同一性尺度の各因子項目と正の相関が、「進路選択の自己効力」と「気力の欠如」・「学業からの退却」・「集中力の困難さ」・「将来への展望」との間で負の相関がみられた。

【考察】

男女共に、気力の欠如と将来への展望、進路選択の自己効力との間に関連性があった。これはやる気がないほど、将来の目標や計画が立てられず、自分の興味や能力の適正を理解し、進路決定することが困難な傾向にあると言える。また、女性は、物事に集中することが出来ないと、学業領域から退去する傾向がある。これは学生の本業である学業から退去しているので、その先の進路についての退去してしまうと考えられる。

【参考文献】 「臨床心理学研究の倫理と現実」 下山晴彦(1997)